

研究報告

新型コロナウイルス感染症により臨地実習の制限を受けた新人看護師の 看護能力の現状 ―教育担当者のアンケートから―

林 憲吾¹⁾ 山田礼子²⁾ 杉山綾菜²⁾ 城 憲秀²⁾

¹⁾藤田医科大学病院 ²⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科・中部大学看護実習センター

要 旨

目的：新型コロナウイルス感染症の流行により看護学生時に臨地実習の制限を受けた新人看護師のコミュニケーション能力、看護実践能力、肉体的・精神心理的状态の実態について、新人教育担当看護師を対象とした質問紙による横断調査を通じて、教育担当者の視点での現状を明らかにする。

方法：新型コロナ流行前の新人看護師(2019年以前の入職者)と新型コロナにより臨地実習を制限された新人看護師(2023年4月入職)の能力を比較するため、愛知県下の地域医療支援病院3病院に協力を依頼し、そこに勤務する新人看護師教育指導経験者である看護師199名を対象とした自記式質問紙調査を2023年8月に実施した。

結果：2019年以前にも教育経験のある教育担当看護師101名の40～50%が、2023年度入職新人看護師のコミュニケーション能力が2019年以前入職の新人看護師と比較して、「やや低い」「低い」と答えた。特に「報告・連絡・相談する能力」は「やや低い」「低い」を合わせると50.3%を占めた。一方、新型コロナ流行後の新人看護師の看護実践能力は、約60%の教育担当看護師において流行以前と変わらないと判断していた。看護実践能力のなかで、「感染予防行動」については「高い」という評価が10%程度のナースから示された。「症状・生体管理技術」の項目は「低い」という回答が40.7%であった。

結論：協力病院の各病棟の教育担当看護師の調査から、新型コロナ流行後入職の新人看護師では、それ以前の新人看護師に比べて、看護実践能力よりもコミュニケーション能力が低下していると考えられた。このことから感染症などで健康危機が生じ、臨地実習の制限が生じた場合には看護師養成にあたってコミュニケーション教育に対する配慮が必要である。

キーワード：新型コロナウイルス感染症(COVID-19)、看護師新人教育、看護実践能力、コミュニケーション技術

1. はじめに

2019年に中国で初めて検出された新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナとする)は、世界的流行(パンデミック)を引き起こし、わが国においても2020年から2023年5月8日までの3年間で累計感染者数は約3400万人にのぼる¹⁾。新型コロナ重症者数の急激な増加に伴い、病床使用率が9割を超える事態

となり、全国的に医療ひっ迫の状態が生まれ医療崩壊とまでいわれていた。

新型コロナ流行時においては、医療機関は院内における感染対策を徹底するため、看護学生等医療系学生の臨地実習の受け入れも停止・短縮などの措置がとられた。「新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等

の実施状況調査」²⁾によると、大学の看護師等養成課程の全学年の臨地実習の代替措置(臨地の場合以外での教育代替)の実施有無では、289 課程中 40%が「すべての科目で実施した」、57%が「一部の実習科目で実施した」と報告しており、ほぼすべての大学において看護師養成課程の臨地実習が何らかの形で制限された。このように新型コロナ流行による臨地実習の機会が限定されたことで、看護学生のほとんどが病院での経験を十分得ることなく、紙上事例などの代替実習での修学となったわけである。

大崎ら(2023)³⁾は、実習ができない学びの限界として「看護技術やコミュニケーションなどの臨床経験の不足」をあげ、臨地実習の制限により看護学生のケアなどの手技や患者などに対するコミュニケーションといった現場ならではの経験をすることが難しくなると述べている。また、このような学生期における実習の制限は、就職後の新人看護師の能力等にも影響を与えている可能性がある。三浦(2021)⁴⁾は、2021 年度、学内実習と臨地実習を経験した学生にインタビューした中で、「学内でのシミュレーションにはおおよその答えがある。臨床ではその判断があっているか看護師ですらわからない状況で患者の反応を探りながら実践を行う。ここに実習の意味と難しさを感じた」との発言があり、臨地実習の意義、重要性を述べている。富樫ら(2022)⁵⁾は、4 名と限られているが、新型コロナ流行下で臨地実習を実施した看護学生に半構造化インタビューを実施した。その結果、臨地実習は新人看護師として就職した際に学内実習では得られない「現実感のなさ」を埋める体験であることを示唆した。

太田ら(2021)⁶⁾は、2020 年に新型コロナ流行により統合実習が実施できなかった看護学生を対象に実習に対する評価のアンケートを行ったところ、看護技術やコミュニケーション等、臨床経験不足は否めず、医療機関と新型コロナ流行下の実習方法並びに継続教育について連携強化する必要性が示された。三浦ら(2024)⁷⁾も、新型コロナ禍前後の新人看護職員の臨床実践能力及び社会人基礎力の自己評価について報告している。新型コロナ禍群の臨床実践能力は

新型コロナ流行前群と比較して有意に低く、傾聴力や規律力などの社会人基礎力については両群で有意な差はみられなかったと述べている。

先行研究では、実習中止・短縮を経験した新人看護師の思いや考えについて記載されており、フォローアップ研修が行われているが、実習不足の影響は十分に明らかになっていない。そこで新型コロナ流行以前で臨地実習が十分にできていた頃に教育を受け病院に就職した新人看護師と、流行によって実習制限を受けた新人看護師の看護能力の差を客観的な視点から明らかにする必要があると考えた。

新型コロナの大流行は現時点では収まったとはいえ、今後も新型コロナあるいは新たな感染症の流行はあり得る。感染症などの大きな流行があるときには、今回の状況と同じく医療機関が実習の中止・短縮を行うこともある。新型コロナ流行による看護学生の臨地教育の不足によって起こる事態を明らかにすることは、将来の感染症パンデミックの際の参考資料となると考える。

そこで、本研究では、新型コロナ流行時における臨地実習不足の影響を明らかにする必要があると考え、新型コロナ流行前に臨地実習を受講し就職した新人看護師と、流行時に臨地実習受講となった新人看護師の能力等の差を探るために、教育担当看護師を対象とした質問紙調査を実施した。能力等の差を教育担当者の第 3 者的視点から明らかにすることで、臨地実習制限を受けた新人看護師に対する今後の教育支援のあり方について検討したいと考える。

II. 研究方法

1. 研究対象

愛知県下にある看護系大学の実習病院で、機縁法により調査協力が得られた地域医療支援病院 3 病院を調査場所とし、そこに勤務する看護師を対象とした。2023 年度入職新人看護師の教育指導にあたった看護師長・副師長、主任看護師およびプリセプターなどを務めた看護師 199 名を調査対象者として質問紙調査を実施した。調査は、2023 年 8 月中の 2 週間で実施した。調

査対象者 199 名のうち 180 名から回答が得られた(回収率 90.4%)。今回の解析では、それらの回答者のうち、2019 年度以前に指導経験のある看護師 101 名(有効回答者率 50.7%)に限って実施した。

2. 質問紙設問内容

質問紙は以下に示す 4 つの領域の設問(基本属性、新人看護師のコミュニケーションの能力の主観評価、新人看護師の看護実践能力主観評価、新人看護師の疲労・ストレス状況)から構成した。

1)基本属性

役職、所属病棟、勤務年数、2019 年以前の新人看護師教育の有無、新人看護師を支える組織制度、新人看護師研修の工夫

2)コミュニケーション能力

新人看護師のコミュニケーション能力の測定では、厚生労働省が作成した新人看護職員研修ガイドライン改訂版(2014)⁸⁾の中から看護職員として必要な基本姿勢と態度についての到達目標を参考に評価項目を作成した。同ガイドラインでは、1 年以内に到達を目指す項目として「患者の理解と患者・家族との良好な人間関係の確立」「組織における役割・心構えの理解と適切な行動」があり、前者では、「患者を一個人として尊重し、受容的・共感的態度で接する」「患者・家族にかかわりやすい説明を行い、同意を得る」、後者では、「同僚や他の医療従事者との適切なコミュニケーションをとる」という 3 つの項目がある。これらを参考にし、本研究では、「患者さんとのコミュニケーション能力」「患者さんとの会話で非言語的コミュニケーション能力」「新人看護師－看護師間での会話のスムーズさ」「新人看護師－看護師間の会話での非言語的コミュニケーション能力」「新人看護師による報告・連絡・相談する能力」「新人看護師－多職種間でのコミュニケーション能力」の項目を立て、それら項目に対し 2023 年度入職の新人看護師と 2019 年以前入職の新人看護師の能力につい

て、2023 年度入職者のほうが新型コロナ流行以前の入職者より「高い」「やや高い」「変わらない」「やや低い」「低い」の 5 件法で回答してもらった。

3)看護実践能力

看護実践能力の測定では、厚生労働省が作成する新人看護職員研修ガイドライン改訂版⁸⁾の中から看護技術についての到達目標として「環境調整技術」「食事援助技術」「活動・休息援助技術」「清潔・衣生活援助技術」「症状・生体管理技術」「感染予防技術」が 1 年以内に到達を目指す項目として示されている。本研究では、看護技術についての到達目標から、看護学生時に臨地実習で経験する看護技術の項目を選出した。評価法はコミュニケーション能力と同様の方法で行った。

4)新人看護師の肉体的・精神心理的影響

新人看護師の肉体的、精神心理的影響の測定については、「不安」「悩み」「疲労」「ストレス」の側面で、コミュニケーション能力評価と同様に 2023 年度入職者と 2019 年度以前入職者の違いを観察した。

3. データ収集方法

対象病院の看護部に書面にて調査協力を依頼し、協力承諾書と調査対象数を確認した。その後、看護部に質問紙を送付し、対象看護師への配布等を依頼した。対象者には施設内に回収箱を設置して、回答した質問紙を投函してもらうこととした。その際に、回答した質問紙は封筒に厳封して提出することで回答内容の第 3 者への漏洩を防いだ。投函された質問紙は、研究者が施設へ出向いて回収を行い、また対象病院の希望によっては郵送にて回収を行った。

4. データの分析方法

2023 年度入職の新人看護師のコミュニケーション能力、看護実践能力、新人看護師の精神心理的影響の項目を単純集計した。また、看護実践能力とコミュニケーション能力については、両能力に関する設問に対する回答をすべてまと

めた形でクラスタ分析を行い(カイ 2 乗測度を用いたグループ間平均連結法による階層クラスタ分析)、項目間の類似性について評価した。データ分析には、中部大学に設置された統計解析用ソフト IBM SPSS Statistics ver.28.0 を使用した。

5. 倫理的配慮

本研究は、中部大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号：20230022)。研究目的、内容、方法、倫理的配慮を研究対象病院の代表者に説明を行い、研究協力への同意を得たうえで、研究対象病院の看護部より研究対象者に調査質問紙を配布した。研究対象者には、調査への協力は自由であり、協力しない場合でも不利益は生じないこと、個人が特定されないことなどの倫理的配慮の内容および研究責任者の連絡先を文書で示した。

III. 結果

回答者の職位をみると、看護師長・副師長が全体の 27%、主任看護師が 47%であり、役職者が 4 分の 3 を占めていた(表 1)。病棟等の所属では約 3 分の 1 が内科系病棟、3 分の 2 が外科系病棟であった。回答者の平均看護師経験年数は約 19 年、現病院勤務年数は約 15 年と役職者が多いこともあり比較的長い経験を有していた。

これらの回答者による 2023 年度入職の新人看護師の看護の能力について 2019 年度以前入職者との違いを評価してもらったところ、図 1 のような結果を得た。コミュニケーション能力の 6 項目に関して、およそ 4 割の回答者が、2023 年度入職者は 2019 年度以前入職者よりも「やや低い」、「低い」と感じていた。一方、看護実践能力については、約 2 割の回答者が 2023 年度入職者で「やや低い」、「低い」と評価したが、70%以上の回答者は「変わらない」という評価であった。看護実践能力のうち、生体危機管理技術に対する評価はむしろコミュニケーション能力と同じようなパターンが観察された。

また、新人看護師の精神心理的な状況に関す

る評価については、新人看護師の不安状況は、2023 年度入職者のほうが新型コロナ流行以前の者よりも高いとする回答者が 4 割存在した(図 2)。悩みや疲労、ストレスのについても約 3 割の回答者が、2023 年度入職者で高いと感じていた。

看護師のコミュニケーション能力、看護実践能力の 12 項目について設問項目間の類似性を探るため、クラスタ分析を実施した(図 3)。その結果、これらの設問項目は大きくコミュニケーション能力と看護実践能力の 2 つに分類された。さらにコミュニケーション能力は、对患者、看護師間、多職種間のコミュニケーション能力に 3 分された。看護実践能力では、食事援助、清潔・衣生活援助、環境調整、活動・休息援助技術が比較的まとまった類別となった。感染予防技術や症状・生体危機管理技術は、それらとはやや異なる傾向を示した。

IV. 考察

2023 年度入職の新人看護師のコミュニケーション能力について、新人看護師の教育に関わった教育担当の看護師の評価では、約半数の者が「変わらない」とみなしていた。しかし、残りの半数が「やや低い」、「低い」と評価した。看護師は業務を行っていくうえでコミュニケーション能力は必要不可欠である。入職者のコミュニケーション能力に低下があると評価した教育担当者が約半数だったことを考えると連携が取れず医療過誤につながるリスクが高くなる。また、命を守り、健康を維持増進していくことが困難になると考えられる。この能力低下には、新型コロナ流行により他者との交流が断たれたことが考えられる。瀬古・香川(2022)⁹⁾は、非対面コミュニケーションが増えたことで人間関係が希薄化し、社会的スキルの減少につながっていると述べている。大学では、新型コロナ流行に伴い、リモートでの授業が多く行われた。学生間の交流の場であるイベントなども中止となった。家族以外と会話する機会が減少したこと

表1. 回答者の役職,所属,経験年数,勤務年数

		回答者数
回答者総計		101 名
役 職	師長	21 名
	副師長	6 名
	主任看護師	47 名
	一般看護師	27 名
所 属 (複 数 回答)	内科系	38 名
	外科系	62 名
	ケアユニット	10 名
	その他	11 名
平均看護師経験年数		18.9±7.37
平均病院勤務年数		14.7±8.38

表中の平均看護師経験年数および平均病院勤務年数は、平均値±標準偏差

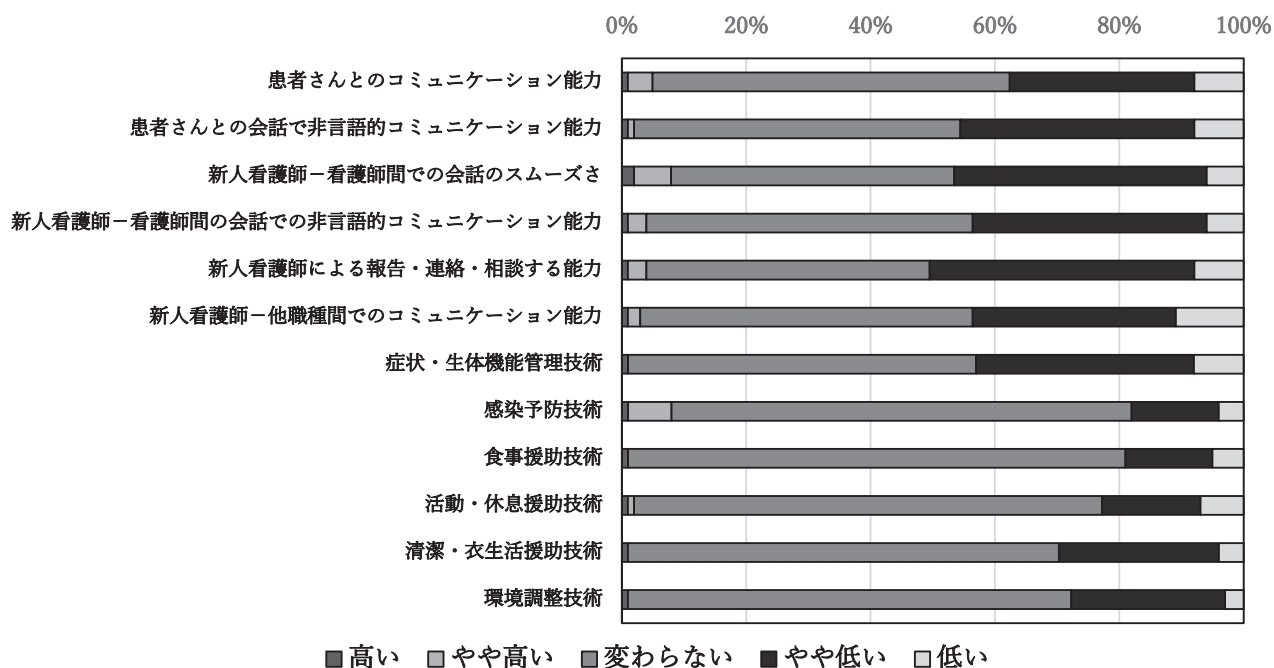


図 1. 2020 年以前に教育経験がある看護師による 2023 年度入職者に対する能力評価

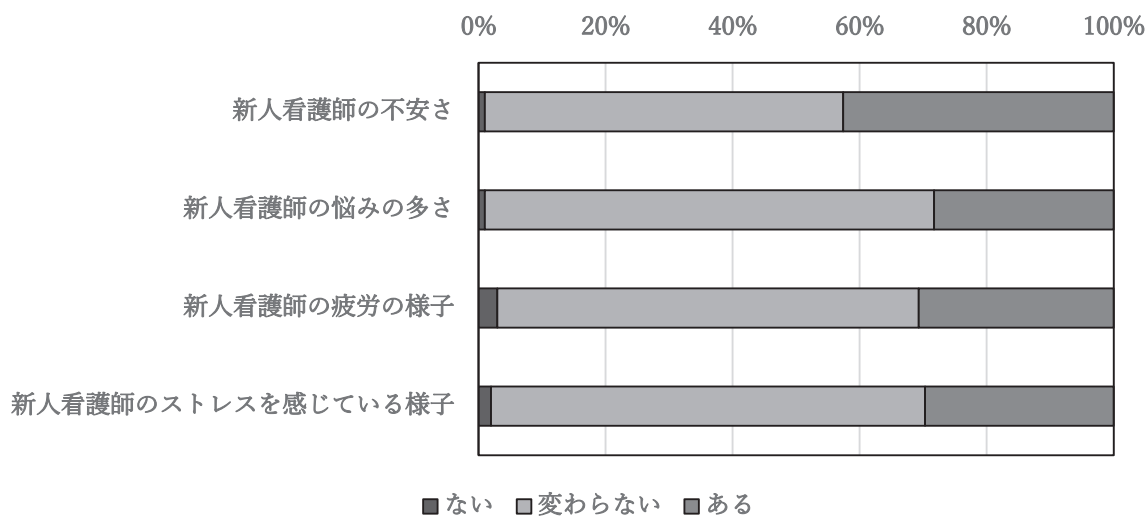


図2. 2020 年以前に教育経験がある看護師による 2023 年度入職者における精神的心理的影響に関する評価

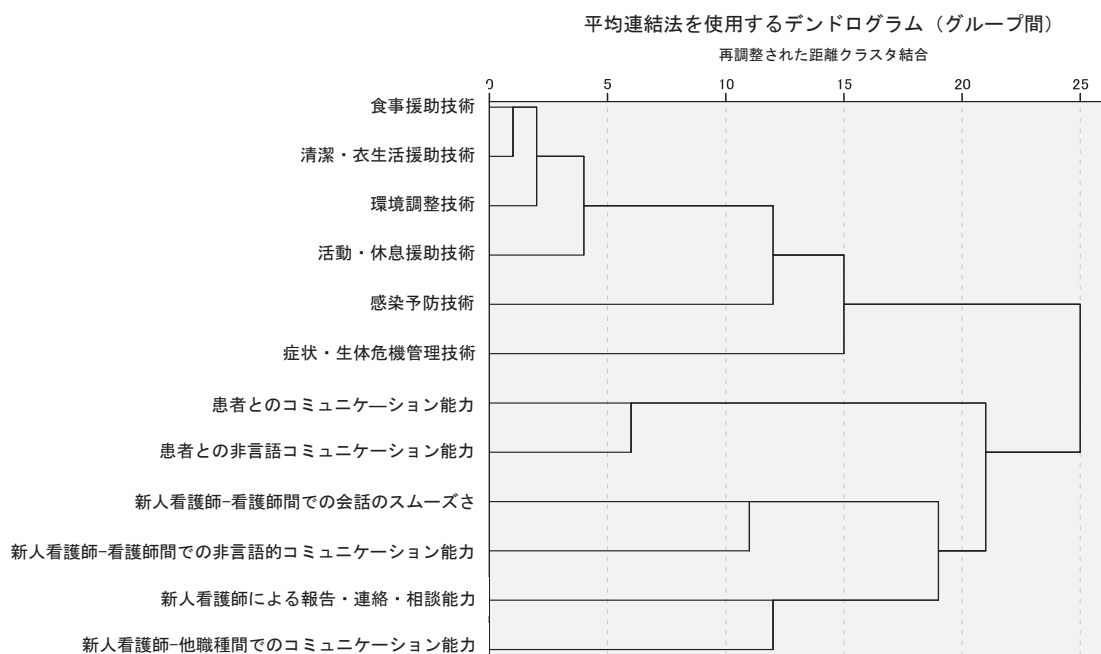


図3. 看護師能力評価に関するクラスタ分析結果

カイ 2 乗測度を用いたグループ間平均連結法による階層クラスタ分析結果である。

でコミュニケーション能力が低下したと考えられる。また、大崎ら(2023)³⁾は、対面演習形式の実習ができない学びの限界として、看護技術やコミュニケーション等の臨床経験が不足していると報告している。看護学生は、臨地実習の制限から患者や臨床看護師、他職種との関わりが減少したことで、さらに現場で使うコミュニケーション能力が低下したと考えられる。

特に低下していると回答が多かった能力は「新人看護師による報告・連絡・相談する能力」である。臨地実習の中止に伴い教育機関は、代替案を出し、学内実習で知識や技術を補填していた。実施内容としては、紙上事例での看護過程の展開や模擬患者を用いたシミュレーション教育を行っていた。紙上事例や模擬患者であるため、看護過程を学ぶことはできるが、実際に患者とコミュニケーションを取ることも現場の看護師とコミュニケーションを取る機会もない。患者との関わり方が分からず、バイタルサイン測定などの報告も経験せずに卒業を迎えたことは否めない。細野ら(2019)¹⁰⁾は、「転落・転倒」などのインシデントは、「報告・連絡・相談」の不足が発生に影響していると述べている。病院に慣れておらず、経験が不足している新人看護師であるならば、経験のある先輩看護師の指導、協力、連携のために「報告・連絡・相談」はなおさら必要な能力である。そのため、報告に関する教育を行う必要があると考える。本研究に対して協力を得ることができた3病院では、2023年度入職の新人看護師に対して「技術習得の期間を取っている」などの対策はとっていたものの、報告・連絡・相談に対しての研修や工夫をしているといった回答はなかった。そのため、報告・連絡・相談の重要性や効率的に伝えられるポイントなどの教育が必要である。報告の研修を行うことで分かりやすく伝えることができ、業務の効率が良くなりまた、連絡・相談に関して規則や型を作ることで効率化が測れるのではないかと考える。

新型コロナによる影響を受けたコミュニケー

ション能力は、報告・連絡・相談の能力だけではなく、看護師間のコミュニケーション能力でも以前より低下しているとの評価が得られた。この背景には、新人看護師と看護師、他職種間でのコミュニケーションを取る機会自体が減少していることも影響している可能性がある。筒井ら(2021)¹¹⁾はコロナ禍の影響により、同僚や職場の先輩とも勤務以外で接点を持っていないことや食事時間も黙食となり、仲間作りや職場風土に慣れていくことが困難な状況が伺えたと述べている。同じように本研究の自由記載欄からも「入職してからも飲み会がなく、黙食が続く、同僚や上司、多職種とのコミュニケーションが取れていない」、「同期で仲良くしていない」と回答を得た。飲み会や食事を取り入れつつ新人看護師が病院や同僚、先輩看護師などと馴染むことができ、病院内外で関わりを持つことができるように、例えば病院関係者で運営されているクラブ活動の活用などが必要であると考えられる。

看護実践能力は、コミュニケーション能力に比較して、以前より能力が低いとする指導者の割合は低く、多くの項目で20-30%程度であった。末永ら(2022)¹²⁾は、新型コロナ流行下で教育を受けてきた新人看護職員の研修担当者を対象としたWEB調査を実施した。その結果、研修担当者は、新人看護職員は実習経験に不足があると感じていたものの業務遂行状況については5割以上が例年と変わらないと回答したと報告している。この点は、本研究での、教育担当者が新人看護師の看護実践能力においては従来とそれほどの違いを感じていないことと一致した見解である。

本研究では、看護実践能力の中で、「感染予防技術」と「症状・生体機能管理技術」については、他の看護実践能力の項目とは評価の状況が異なっており、そのことはクラス分析でも認められた。

2023年度入職者において「感染予防技術」の項目に関して「高い」「やや高い」との回答が約8%存在していた。他の看護実践能力の項目では、「高

い」「やや高い」という回答が2%未満であったことを考慮すると評価が高いように思われた。これは、新型コロナ流行の影響から感染予防の意識が高くなったことが考えられる。達川・藤村(2022)¹³⁾は、日頃よく利用するコンビニなどにも「マスク着用」の張り紙があり、新型コロナ流行においては、マスクの着用は当たり前のようになっていた。また、看護学生は、看護基礎教育の中で手洗い、手指消毒の重要性を学び、技術演習でも実践していたため、感染予防行動として実践することが出来ていたと述べている。繰り返し、日常的に行っていたことで、感染予防の意識付けがなされ技術の習得に結びついたと考える。

一方で、「症状・生体機能管理技術」に関する能力は、コミュニケーション能力と同じく、新型コロナ流行以前より低いと判定する指導看護師の割合が高かった。クラスタ分析でもこの能力は看護実践能力に関する項目の中では他の項目と一線を画する傾向が示された。「症状・生体機能管理技術」は、バイタルサインの観察、身体計測など患者の現状把握のための基礎的測定能力ともいえ、その測定のためには患者等との意思疎通が必要となる。このことによって、「症状・生体機能管理技術」の能力評価が、むしろコミュニケーション能力の評価と近い結果に至ったものと考察する。

看護教育機関で看護基礎教育を受ける学生は有資格者ではないため、実施できる看護技術は少ない。しかし、看護基礎力を身に着けるためには、教育機関での学びは重要であると考え。バイタルサイン測定や看護過程の展開は、患者に合ったその人らしい看護を提供するために必要な能力である。そして、看護過程の実践学習は、教育機関の実習期間に集中して行われ、看護師国家試験の勉強などによって実習期間終了から就職まで間は少なくなる。高橋ら(2014)¹⁴⁾は、大学教育における技術教育で卒業前の技術演習の実施率が低いことを指摘している。常日頃から意識されていた感染予防能力が高くなったことを考えれば、看

護過程や手技については入職までに意識していない期間が増えることで能力の低下につながると考える。そのため、看護過程やバイタルサイン測定などの継続的教育の必要性があると考え。

松本ら(2022)¹⁵⁾によると2021年度入職の新人看護師に看護実践能力についての自記式質問紙調査を行い、特に「看護の計画的な展開」の自己評価は高いことから、より患者の健康ニーズに相応しい看護が実践できていると回答者(2021年度入職の新人看護師)が認識していると述べている。本研究では、2023年度入職の新人看護師の教育担当者からの評価を調査した。新型コロナ流行前と比較して「変わらない」という回答が、およそ半数を占めていたが、「症状・生体機能管理技術」の項目においては、新型コロナ前よりも能力が低下しているとの回答が多くあり、先行研究との違いが生じた。先行研究は、新人看護師を対象とした調査であり、本研究は、新人看護師の教育担当者である第3者の視点からの調査である。そのため、それぞれの対象者の意識の違いによる影響が考えられる。患者の状態を的確に把握し、その状態にあった判断や選択ができないことは問題である。看護学生は、新型コロナの影響により臨地実習の経験は減少したが、その分、紙上事例やシミュレーション教育により、看護過程の展開を学ぶ機会が多かった可能性もある。このことから、看護を展開する能力に自信が付いた、あるいは能力に対する自己評価が高くなったと推察される。しかし、新人看護師の教育担当者は、長年新人看護師を見てきており、能力を比較したところ「低下している」と感じたと考えられる。要因の一つに、観察能力の不足が考えられる。臨地実習の制限から入職後、患者と上手く関わることができず、症状や状態をみる観察能力が不足したことで、情報収集ができていないことが考えられる。学内実習により情報が与えられた紙上事例のアセスメント力はあるものの、その基となる情報が得られず、結果的に患者の状態を的確に把握することができていないと推察する。

各研究対象病院では、看護実践能力に対して、集合研修やOJT (On the Job Training)といった工夫を行っていた。自由記述欄の中では「コロナ対応に部署から出向するため、教える側に余裕が無い」との回答があり、新型コロナの影響による病棟の人手不足が伺えた。このことから、新人看護師の能力低下に対して、一つの会場で比較的手軽に行える集合研修が適していると考ええる。しかし、江川ら(2018)¹⁶⁾は新人看護師を対象とした集合研修を実施しているが、不安を持つものが多いと述べている。集合研修は一斉に教育を行える反面、個々の習得速度に合わせられないデメリットがある。このデメリットに対してはOJTが有用であると考ええる。掛谷・城生(2017)¹⁷⁾は、OJTが新人看護師の1年後の知識や技術、態度の習熟度を高めると述べており、中でも個別性を合わせたOJTは最も習熟度に影響を与えると述べている。OJTは、実際の業務を行いながら、その中で教育担当が新人に指導する教育方法である。したがって、OJTでは業務の中で教育担当と一緒にいるため、新人看護師にとって個別に指導を受けやすくなる。そのことで、新人看護師は教育担当とともに実際に患者を見ながら実践できるので「症状・生体管理技術」などの技術がよりいっそう養われる。このようなことから、著者らは集合研修とOJTを組み合わせた教育が有用であると考ええる。

新型コロナ流行の影響を受けた2023年入職の新人看護師の精神心理的影響では、新型コロナ流行以前と比較して「変わらない」との回答が多かった。しかし、「不安さ」については、46.8%と半数近く、他の項目より高値であった。新人看護師は、看護師となり新しい環境で初めて働くことに不安があるが、新型コロナ流行の影響により、さらに不安を抱えていたと考えられる。質問紙の自由記載欄の中では、「学生の頃に家族との関わりをほとんどしておらず、患者家族への対応に不安を感じる子が多い」との回答や新人看護師が「実習で学べなかったことを遅れていると捉え、頑張ろうとする思いが強く、疲労感が強い」との回答

もあった。このことから新型コロナによる不安の中には、看護学生時に十分に臨地実習で学べなかったことからの「自信のなさ」があると考ええる。

教育機関でも新人看護師が実際に働く際に「自信のなさ」を軽減できるような対策が必要であると考ええる。高橋ら(2014)¹⁴⁾は大学を卒業した新人看護師と専門学校卒業看護師の看護技術の卒業時における技術到達度の現状を比較検討したところ、大学卒業者は専門学校卒業者より到達度が低く、その要因を卒業前の技術演習実施率が大学卒で低いことに起因していると示唆した。そして、卒業前に集中的にトレーニングを行うことは、自信を持たせることや技術の向上を図るうえで有用と述べている。中山ら(2021)¹⁸⁾は、実習制限を受けた看護学生に対して卒業前に看護技術のフォローアップ研修を行い、学生から「4月から就職するにあたり、もう一度技術を行えたことで少しは不安が軽減された」との意見を聞いている。このことから、卒業前に行う看護技術の演習が新人看護師の技術の質や自信に関わっていることが考えられる。卒業前という時期にシミュレーション教育や模擬患者を使用した看護技術演習の試みが必要であると考ええる。

有村(2019)¹⁹⁾は、新人看護師の看護技術は、先輩や患者からの評価が、「できる実感」につながり、理想の看護師像に近づくことや周囲からの支えによって「意欲」の再構築を行っていると述べている。加えて、配属先で良好な人間関係が作れたり、悩みに対する支援が得られたりすると職業継続意欲を高めると述べている。古川・細田(2022)²⁰⁾は関心を持ってくれるメンターの存在は心強く、その関心自体が精神的な支えとなっていたと述べている。また、山岡ら(2023)²¹⁾は、面談が不安の軽減に繋がると述べている。このことから、先輩看護師や上司と関わることは、新人看護師の精神心理的な支えとなっていると考えられる。今回の研究対象病院では「不安」や「自信のなさ」などに対してストレスチェックやチューターシップを導入し、新人看護師が不安や悩みを相談しやす

い環境を整えていた。また、年に2回、師長との面談を設けている病棟もあった。チューターや師長との面談を設け、普段から相談しやすい環境を整えることで、周囲に言い難いことを的確に受け止める工夫がなされていた。しかし、コミュニケーション能力の低下から人間関係が上手く構築されていない場合では、相談すること自体に苦手意識を持ってしまうと考えられる。機会があっても活用できないことや相談すること自体が悩みの原因となることが考えられる。整備された環境を有効的に新人看護師が活用できるように、新人看護師が人間関係を構築しやすくなるプログラムや十分な説明をしていく必要がある。他者と関わることを苦手としている人もいる。関わるうえでお互いが不快な思いをしないように、事前に新人看護師に対して自信のないことや不安、配慮してほしいことなどをアンケートで調査することやプログラムの参加を自由にするなど考慮して、個々に合わせたコミュニケーションを取っていく必要がある。

なお、本研究の限界として、研究対象病院の局在と病院数の少なさ、回答者数の不足があげられる。同一県に所在する病院であり、地域性が影響する可能性もある。また、病院数も限られており、病院の特徴(今回は地域医療支援病院のみ)などにより結果が左右されることもありうる。これらの点からは、今後、さらに対象病院・対象者の範囲を拡大して調査を実施することが望ましいと考えられる。ただし、今回の調査結果に限って言えば、結果に病院間の違いは大きくなく、結果の信頼性は高いと推察している。

V. 結論

1. 新型コロナ流行前の新人看護師の能力と 2023 年入職の新人看護師の能力の差について、新人看護師の教育担当看護師を対象として断面調査したところ、研究対象病院の各病棟の新人教育に関わりのある看護師の半数からコミュニケーション能力が低下しているとの回答が得られた。

2. 看護実践能力では、各項目で 70%前後の回答者が「変わらない」と応えていたが、「感染予防行動」については「低い」「やや低い」を合わせた回答が 16.9%で最も低値であった。一方で「症状・生体管理技術」の項目は「低い」という回答が 40.7%で他の看護技術より多かった。

3. 新人看護師の精神心理的影響については、新型コロナ流行前と比較し、「不安」があるとの回答が 46.8%得られた。

4. 2023 年に 5 類感染症に移行されたとはいえ、新型コロナの感染力は強く、未だ治療薬は完成されていない。今後も感染拡大により看護学生の教育に支障をきたすことや、新たな感染症流行も考えられる。今回、「感染予防行動」に関しては以前よりも「高い」と回答があり、日常的の行われていることに関しては職場でも活かされていると考えられる。一方で臨地実習の制限により「コミュニケーション能力の低下」や「症状・生体機能管理技術」、「不安」が指摘された。新型コロナによる学業への影響が明らかとなった。そうした臨地実習の経験不足に対して、個々の能力に合った教育や支援の工夫を今後も継続していく必要がある。

謝辞

本研究に快くご協力くださいました病院看護部の皆様に心より感謝申し上げます。とくに、新人教育にあたられた看護部長、師長、看護師の皆様に衷心より厚く御礼申し上げます。

本研究の一部は、2023 年度中部大学生命健康科学部保健看護学科卒業論文(林 憲吾)として発表した。なお、COI に関して開示すべき事項はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省(2023): データからわかるー新型コロナウイルス感染症情報ー 陽性者数(累積), <https://covid19.mhlw.go.jp/>.
- 2) 文部科学省(2021): 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について, 新型コ

- コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書.
- 3) 大崎真, 早坂笑子, 松田優二 他(2023): 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価: シミュレーション教育を活用した看護技術演習の試み, 東北文化学園大学看護学科紀要, 12(1), 11-20.
 - 4) 三浦友里子(2021): COVID-19 感染拡大における看護学教育に関する官公庁等の動向と学生が認識した臨地実習での学習経験, 聖路加看護学会誌, 24(2), 51-54.
 - 5) 富樫千秋, 高橋方子, 米倉摩弥 他(2022): 新型コロナウイルス感染症が流行している時期における臨地実習, 千葉科学大学紀要, 15, 23-31.
 - 6) 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子(2021): 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価-学生アンケート結果から-, 東北文化学園大学看護学科紀要, 10(1), 27-42.
 - 7) 三浦奈都子, 高橋有里, 遠藤良仁, 高屋敷麻理子, 福島裕子(2024): COVID-19 禍前後の新人看護職員における臨床実践能力と社会人基礎力の自己評価の比較-岩手県立大学看護実践研究センターの取り組み-, 岩手県立大学看護学部紀要, 26, 15-23.
 - 8) 厚生労働省(2014): 新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】, 2014 年 2 月.
 - 9) 瀬古文, 香川香(2022): 学生相談におけるアサーション・トレーニングプログラムの実践, 関西大学心理臨床センター紀要, 13, 13-22.
 - 10) 細野恵子, 鈴木里奈, 武市千穂 他(2018): 看護系大学の臨地実習におけるインシデント発生の実態とインシデントに対する学生の認識, 旭川大学保健福祉学部紀要, 10, 45-53.
 - 11) 筒井早希, 紀平由紀子, 菱沼典子(2021): 新型コロナウイルス感染症流行下(令和 3 年度)における新人看護職員研修, 三重県立看護大学紀要, 特別号, 31-38.
 - 12) 末永由理, 嶋崎奈津子, 小澤知子 他(2022): 新型コロナウイルス感染症流行下における新人看護職員研修の実態調査, 厚生労働行政推進調査事業費補助金(厚生労働科学特別研究事業)総括研究報告書, 1-14.
 - 13) 達川まどか, 藤村一美(2022): 新型コロナウイルス感染症流行下における看護学生の感染予防行動・精神的 ken 健康度の実態及び心理社会的要因との関連, 日本健康学会誌, 88(3), 98-108.
 - 14) 高橋甲枝, 村山由起子, 東玲子(2014): 新卒看護師の看護技術の到達状況と看護系大学における技術教育の課題ー大学卒と専修学校卒を比較してー, 西南女学院大学紀要, 18, 33-43.
 - 15) 松本晃子, 西上あゆみ(2022): COVID-19 により修学に影響を受けた新人看護師のレジリエンスと看護実践能力-2020 年度と 2021 年度入職の新人看護師を比較して-, 日本看護学会誌, 42, 661-669.
 - 16) 江川伸子, 川島いづみ, 坂倉小夜子(2018): 新人看護職員技術支援室, 日本医療マネジメント学会雑誌, 19(2), 119-123.
 - 17) 掛谷和美, 城生弘美(2017): 中規模病院における新人看護師の習熟度に影響する要因ー職場環境と新人研修プログラムの側面からー, 日本看護研究学会雑誌, 40(5), 791-802.
 - 18) 中山由美, 重年清香, 渡邊敦子(2021): COVID-19 禍における看護学生への卒業直前看護技術フォローアップ研修, 梅花女子大学看護保健学部紀要, 12, 26-32.
 - 19) 有村優範(2019): 病院に就職した新人看護師に関する研究の動向 -職場適応, 職業継続意思, 離職に焦点をあてた文献検討-, 愛知県立大学看護学部紀要, 25, 33-45.
 - 20) 古川亜衣美, 細田泰子(2022): 新人期看護師におけるメンタリング機能の検討, 日本看護学教育学会誌, 32(1), 13-25
 - 21) 山岡八千代, 平上久美子, 澤田由美(2023): COVID-19 禍における新人看護師の教育に関する文献検討, 姫路獨協大学看護学部紀要, 7,

53–61.

Title: Current Status of Nursing Practice Competence Among Newly Graduated Nurses Affected by COVID-19 Clinical Training Restrictions: A Cross-sectional Survey of Nurse Educators.

Author(s): Kengo Hayashi¹⁾, Reiko Yamada²⁾, Ayana Sugiyama²⁾, Norihide Tachi²⁾

Address(es): ¹⁾Fujita Medical University Hospital, 1-98 Dengakugakubo, Kutsukake-cho, Toyoake, Aichi, Japan, and ²⁾Chubu University College of Life and Health Sciences and Center for Nursing Practicum Support, 1200 Matsumoto, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan

Keywords: COVID-19, New nurse education, Nursing practice competency, Communication skills.

Abstract: This study aimed to clarify the actual status of communication skills and nursing practice competence among newly graduated nurses whose clinical training was restricted during nursing school because of the COVID-19 pandemic. A cross-sectional questionnaire survey was conducted among nurse educators responsible for training newly graduated nurses.

Methods: To compare nurses who began work before the COVID-19 pandemic (those hired in 2019 or earlier) with those whose clinical practice was limited (hired in April 2023), a self-administered questionnaire was distributed in August 2023 to 199 nurse educators from three regional medical support hospitals in Aichi Prefecture. Respondents had experience educating novice nurses before and after the pandemic.

Results: Among 101 nurse educators who had also trained nurses before 2019, 40–50% evaluated the communication ability of novice nurses in 2023 as “somewhat lower” or “lower” than that of pre-pandemic cohorts. Especially, 50.3% of nurse educators evaluated “reporting, contacting, and consulting” skills as lower. Conversely,

approximately 60% evaluated the overall nursing practice competence of new nurses as unchanged from pre-pandemic levels. Around 10% rated infection prevention behaviors as “higher,” while 40.7% evaluated symptom and vital sign management skills as “lower.”

Conclusion: Nurse educators perceived that communication skills, rather than nursing practice competence, declined among post-pandemic novice nurses. These findings suggest that, during future health crises that restrict clinical practice, nursing education should place greater emphasis on communication skill development.